

トマス・アクィナスによる個の論理

——神が個であることの意味をめぐって——

石田 隆 太

序

トマス・アクィナスの著作において神が個であることが問題になる文脈としては、神の単純性 (simplicitas) が論じられる文脈をまずは挙げることができる。神の単純性を示す論点の一つとして、神がいかなる類の内にもないという主張にトマスは同意する。ここでの類 (genus) とは主としてアリストテレスに由来する十のカテゴリー (実体、量、質、関係、場所、時、態勢 (dispositio)、所持 (habitus)、能動、受動) のことである。西洋中世の神学者たちによって頻繁に参照されたペトルス・ロンバルドゥスの『命題集』という神学の教科書でも、アウグスティヌスの『三位一体論』を典拠としながら、神は完全に単純なものであり、量や質などの附帯性によって述定されず、さらに固有の意味では神は実体でもないのだということが述べられている⁽¹⁾。ロンバルドゥスの『命題集』に註解を施しているトマスもこのような文脈を踏まえていることは明らかである。実際、トマスの『ロンバルドゥス「命題集」註解』では、神の単純性について「第一には、神には全き仕方の単純性があるのかどうか、第二には、神は実体の範疇に含まれるのか否か、第三には、[実体以外の] 他の諸々の範疇が神について言われるのかどうか」⁽²⁾が問題とされ、ロンバルドゥスと同様の見解がトマスの見解として提示されている。

神がいかなる類の内にもないという主張は、『命題集』註解』のみならず『対異教徒大全』、『神学大全』というトマスの主要著作すべてにおいて見られる主張であり、トマスにとって重要な論点の一つであったことが窺える。その中でも、おそらく1265年10月から1268年頃に書かれたとされる『神学大全』第1部⁽³⁾の第3問題第5項の記述は、当該の主張を述べる箇所としては最後のものであるが、それとほとんど同時期の著作である『定期討論集 神の能力について』の第7問題第3項の主文でも神がいかなる類の内にもないということがトマスの見解として述べられている。神がいかなる類の内

もないことの理由を述べた上で、トマスは最後に次のような言明を行っている。

さらに、以上のことに基づけば以下のことが明らかである。神は種 (species) ではなく、個 (individuum) でもない⁽⁴⁾。

ところが、『神学大全』第1部第3問題第2項には次のような記述が見られる。

質料に受容されえず、自身を通じて自存するものであるような形相は、他のものに受容されえないというまさにこのことに基づいて個体化されるのであり、神はこのような形相である⁽⁵⁾。

この引用箇所では、質料との複合を必要としない形相は自身を通じて個体化されており、そのような形相がまさに神であるということが明言されている。端的に言えば、質料との複合を必要としない存在者は、質料を介した個体化を蒙ることなくそれ自体で個であるような存在者だということになる。つまり、後で詳しく見るように非質料的な存在者である神は、自身を通じて個体化されているという意味では正当に個であると言えるはずである。しかしながら、前述の通り、『神の能力について』からの引用箇所では神は個ではないと明言されていた⁽⁶⁾。ここには一見すると矛盾があるように思われるが、このような疑問点を解消することを通じてトマスの思想における個の論理に関する理解を深めることが本稿の目標である。

第一節では、『神の能力について』第7問題第3項の記述を出発点にしなから、神は個ではないと言われている場合の個の意味を分析する。第二節では、『神学大全』第1部第3問題第2項に焦点を当てて、自身を通じて個体化されているということが言われる場合の個の意味を分析し、それがまさに神について言えるような意味での個であることを確認する。第三節では、『対異教徒大全』第1巻第42章や『神学大全』第1部第11問題第4項における神の一性 (unitas) に関する議論を出発点にしなから、神に対してのみ当てはまるような強い意味での個の意味を分析する。結では、全体の議論を振り返りつつ、近世スコラ思想家フランシスコ・スアレスの『形而上学討論集』第5討論第1節からの引用を通して今後の課題を示すことにしたい。

第一節 或る一つの種に属する多数の個：複合実体の個

この節では、『神の能力について』第7問題第3項の主文における「神は種ではなく、個でもない」という言明における「個」の意味を考えてみることにしよう。当該箇所的主文は神がいかなる類の内にもないことを主張するものであるが、そこでトマスは三つの理由を提示している⁽⁷⁾。第一の理由は、個々の事物の存在 (esse) はその事物に固有のものである一方、それぞれの事物の何性 (quidditas、本質のこと) は同じ類の間で共通のものであるということ論拠にするものである。このことから、各々の事物は存在に即して類の内にあるわけではないことを認めることにより、まさに存在そのものである神が類の内にあることが否定される。第二の理由は、各々の事物が質料に基づいては類の論理 (ratio) を持ち形相に基づいては種差の論理を持つことで種の論理を持つということ論拠にして、質料のような可能態を含まない純粹現実態 (actus purus) である神が類の内にあることを否定するものである。第三の理由は、或る類の内にあるものはその類によって限定されているが、端的に完全であるはずの神が何らかの類に属することで限定されるといったことは不可能であることを論拠にするものである。この論拠により、神は何らかの類の内にあるのではなくて自分の内にすべての類の完全性を把握していることが確認される。

以上を踏まえれば、まず神が種ではないということは十分に理解可能なことである。ここでは少なくとも種 (例:人間) は類 (例:動物) と種差 (例:理性的) によって複合されたものとして想定されているので、その点で最も単純なものであるべき神には種であることがふさわしくないことは明らかであろう。それでは、神は個ではないということとはどのような意味で言われているのだろうか。2012年に上梓された『神の能力について』の英訳書で、訳者のリチャード・リーガンはここでの「個」という語を「或る一つの種に属する個」(the individual of a species)⁽⁸⁾と訳している。このような解釈の傍証としては、同じ『神の能力について』第7問題第3項の中では第7異論解答という箇所を挙げるができるだろう。「種ないし個が類の下に含まれるのと同様にして、あたかも類の内に含まれるものとして神は実体の類に属するのではないが」⁽⁹⁾という文言を踏まえれば、この文脈では個が類や種に属するものとして捉えられていると理解することは自然である。ここでは、或る一つの種の一員であるという意味での「個」という概念を見出すことができる。『神の能力について』では、そのような意味で神が個であることが否定されていると理解できる。

或る一つの種の一員であるという意味で個であると通常言われるのは、トマスの体系においては質料を持つ存在者である⁽¹⁰⁾。具体的には、人間を含む動物や植物など、この世界に存在する物的なもの全般のことである。こうした存在者をトマスは、アリストテレス由来の質料形相論の枠組みに則りながら質料と形相の複合からなる複合実体として捉えている。複合実体が個として捉えられるのが一つの種においてであるという点について、トマスは既に初期著作『存在者と本質について』第5章で言及を行っている。神、被造的知性実体（天使のこと）、複合実体において本質のあり方がどのように異なるのかを説明する最後の段階でトマスは次のように述べている。

第三の仕方では、質料と形相からなる諸々の複合実体において本質が見出される。それらにあっては、それらが存在を他のもの〔すなわち神〕から持つがゆえに、存在も受容されたもので有限なものであるし、またそれらの本性ないし何性も指定された質料（*materia signata*）において受容されたものである。…またそれらにあってはもはや、指定された質料の分割のゆえに一つの種における諸々の個の多数化が可能である⁽¹¹⁾。

存在が受容されたものであるという点は神以外の被造物（例えば天使）に共通する特徴であるが、本質が指定された質料において受容されるという点は複合実体にのみ特徴的なことである。『存在者と本質について』第2章で言われていたように、指定された質料は個体化の原理（*principium individuationis*）であり、規定された諸次元（*determinatae dimensiones*）の下にあるものである⁽¹²⁾。すなわち、縦、横、高さの決まった値を他のものとは区別されるような仕方ですべての原理に相当するものである。個体化の原理がわざわざ「指定された」質料であると言われているのは、例えば、人間の定義には端的な意味での骨や肉などの身体が含まれるがゆえに、単なる質料ではしかじかの人間の質料であることを特定化できないからである⁽¹³⁾。このことを一般化するなら、複合実体において、普遍的な意味での質料や形相が何であるのかが規定されている一つのまとまりが種として捉えられる一方で、この世界には同一の種に複数の個体が観察できるのだから、一つの種に多数の個があるということになる。『存在者と本質について』の記述からも、或る一つの種に属する多数のものであるという意味で神が個であるとは言えないというトマスの考えを読み取ることができるだろう⁽¹⁴⁾。

第二節 自身を通じて個体化された形相としての個

次に、神に対して言われうる個の意味について考えることにしよう。まず本節では、序でも引用した『神学大全』第1部第3問題第2項に焦点を当てることにする。『神学大全』第1部第3問題は、全体としては神の単純性が主張される箇所である⁽¹⁵⁾。その第2項の主文では、質料と形相の複合が神にはないことが三つの理由に基づいて主張される⁽¹⁶⁾。第一の理由は、神が純粹現実態であるということを論拠にして、可能態である質料と神が複合されることを否定するものである。第二の理由は、複合実体にあつては、質料が形相の善性を分有する (participare) 限りで分有を通じた善性が見出されるということを論拠にして、第一の善である神が分有を通じた善性を持つことを否定するものである。これにより、分有の担い手となるような質料を神が持たないことが認められる。第三の理由は、能動する者 (agens) の働きが自分の形相を通じたものであるということを論拠にして、最高度に能動する者である神は質料を持たず形相だけの存在者であるはずだということを認めるものである。以上の議論では、神に対して質料性が徹底的に否定されることにより、神が形相だけからなる単純な存在者であることが主張されている⁽¹⁷⁾。その結果として、指定された質料のような個体化の原理が神には適用されないことも明らかとなる。この点を問題にしていたのが第2項の第3異論である。

さらには、質料は個体化の原理である。しかるに、神は個であると思われる。というのも、神は多数のものについて述定されないからである。それゆえ、神は質料と形相からなる複合体である⁽¹⁸⁾。

これに対するトマスの解答は次の通りである。

質料において受容されうるものである諸々の形相は、下に立つ第一の基体であるがゆえに他のものには存在しえない質料 [すなわち指定された質料] を通じて個体化されるものの、形相はそれ自体に関しては、何か他のものが妨害するのではない限り、複数のものによって受容されうる。しかるに、質料に受容されえず、自身を通じて自存するものであるような形相は、他のものに受容されえないというまさにこのことに基づいて個体化されるのであり、神はこのような形相である。それゆえ、神が質料を持つということは帰結しない⁽¹⁹⁾。

解答の前半部分が複合実体について言われていることは前節での考察から明らかである。後半部分も既に序で引用したものである。それではここでの引用で何が改めて判明するだろうか。第一に、前節の内容を踏まえれば、この引用からは個体化という概念が二様に使われていることがわかる。一つは形相が指定された質料を通じて個体化される場合のことであり、もう一つは形相が自身を通じて個体化されている場合のことであり⁽²⁰⁾。第二に、この異論解答では「神は質料と形相からなる複合体である」という異論の結論は否定されているが、「質料は個体化の原理である」や「神は個であると思われる」という前提は特に否定されていないと思われる。もちろん、厳密な言い方をするなら、「質料は個体化の原理である」は複合実体に特化した原理であり、また「神は個であると思われる」に対しては複合実体と同じ意味で個であるわけでないという但し書きをつける必要はあるだろう。しかし次のことを読み取することは十分に可能であると思われる。一つは、単純な形相であるという意味で神は個であると言われるということであり、もう一つは、複合実体における個の意味（すなわち或る一つの種に属する多数の個という意味）と神における個の意味の違いにトマスは自覚的であるということである。

第三節 最大限に一なるものとしての個

前節までの議論だけでも、本稿の当初の目標はいくらか達成しているかもしれない。しかし、神が唯一であることを信仰するキリスト教の神学者としてトマスが、神の個性（と言えるものがあるとすればそれ）を真にかけがえのないものにしてしているのはその唯一性であると考えていることは十分に予想できることである。したがって、神の一性という論点を参照することにより、神の個性をめぐるトマスの考えをより明らかにすることを本節では目指すことにしよう。

神の一性を論じる箇所の一つである『対異教徒大全』第1巻第42章でトマスは、まさに個体化の原理という概念を援用しながら神の一性を主張する議論を用いている。

「神」というこの名によって表示される本性は、この神において自分自身を通じて個体化されたものであるか、あるいは他の何かを通じて〔個体化されたもの〕かである。もし他のものを通じてであるなら、神には

複合があるのでなければならない。もし自分自身を通じてであるなら、その場合には、[神の本性が] 別のものに適合することは不可能である。というのも、個体化の原理であるものは複数のものに共通ではありえないからである。したがって、複数の神がいることは不可能である⁽²¹⁾。

議論の流れは次の通りである。まず神の本性が自分自身によって個体化されているか、それとも他のものによって個体化されているかという選択肢を設けた上で、後者の可能性を排除することで前者が妥当であることが確保される。次に神の本性が自分自身によって個体化されているなら、それはただ一つのものにしか適合しないことが確認される。最後に、以上から、神は唯一のものであって複数の神々が存在するのではないということが結論付けられている。

ここでは個体化の原理という概念が神についても適用されていることが注目に値する⁽²²⁾。さらに、この議論が神の一性を主張する議論であることを踏まえれば、本性が自分自身によって個体化されているということの意味として、そのような本性が適合するものがたった一つしかないという一性の意味が強調されていると言える。

一性の意味が強く強調されているということは、神が最大限に一なるものであることを主張する『神学大全』第1部第11問題第4項でも確認することができる。以下は当該箇所の主文のほぼ全文である。

一なるもの (unum) は不可分の存在者 (ens indivisum) であるのだから、何が最大限に一なるものであるためには、それは最大限に存在者であり最大限に不可分であるのでなければならない。ところで、両方が神に適合する。その理由は以下の通り：[自らに] 到来するような何らかの本性を通じて規定された何らかの存在を持つものではなくて、いかなる仕方によっても規定されない自存する存在そのものである限りにおいて、神は最大限に存在者である。他方で、上で示されたようにあらゆる仕方で単純であるがゆえに、現実態であれ可能態であれ、分割のいかなる仕方に即しても分割されない限りにおいて、神は最大限に不可分である。[以上がその理由である。] それゆえ、神が最大限に一なるものであることは明白である⁽²³⁾。

議論の流れは次の通りである。まず一なるものであることは不可分の存在者

であることを意味することが確認される。次に神が最大限に存在者でありかつ最大限に不可分であることが確認される。神が最大限に存在者であるのは、神が創造主として他のものに全く依存しないような存在を持つからである。神が最大限に不可分であるのは、最高度に単純である神には分割ということが適合しないからである。以上により神が最大限に一なるものであることが結論として述べられている。

注目に値するのは、一性という概念が不可分性や存在という概念によって説明されていることである。「不可分」の原語である indivisum は「個」の原語である individuum と同じ語根であることを踏まえれば、一なるものであることが言えれば個であることが言えるという論理構造を見出す可能性が出てくる⁽²⁴⁾。この可能性を見出すにあたっては、個であることと一であることがトマスによって同一視されていると解釈することを可能にする箇所をまずは提示することにした。

個とは、それ自体では区別されていないのに対して、他のものどもからは区別されているものである⁽²⁵⁾。

各々のものは、一なるものである限りにおいて、それ自体では不可分であり、他のものどもからは区別されているものである⁽²⁶⁾。

「区別されていない」(indistinctum) と「不可分」(indivisum) という言葉の違いはあるものの、これらの箇所からは、個であることと一であることをトマスがほとんど同じ規定によって捉えていることを指摘することができる。

次に存在者であることと個であること概念の連関を吟味することにしよう。例えば、『108の条項についての総長ヨハネス・ヴェルチェリに対する解答』第108項では、「各々のものは存在を保持するというに即して一性と個体化(individuatio)を保持する」⁽²⁷⁾とされている⁽²⁸⁾。『定期討論集 魂について』第1問題第2異論解答では、「各々のものは同じものに即して存在と個体化を保持する」⁽²⁹⁾と言われ、『定期討論集 霊的被造物について』第9項第3異論解答では、「各々のものは同じものに即して一なるものであり存在者である」⁽³⁰⁾とされている。これらの言明はすべて直接には人間の魂の個体化をめぐる議論の中で言われていることではあるが、どれもそれぞれの議論の中では一般的な原理として機能している。

まず『魂について』で言われているように、存在者であることと個である

ことは同一の観点から見出される。他方で、『靈的被造物について』で言われているように、存在者であることと一であることは同一の観点から見出される。個であることと一であることがほとんど同一視されているという上述の論点を踏まえれば、『魂について』や『靈的被造物について』の言明からも、個であることと一であることの或る種の同一視を読み取ることができる。そして『ヴェルチェリに対する解答』では、最終的に、或るものが存在者であることがわかれば、その或るものが一であることや個であることも見出されるようになる。したがって、各々の事物における存在の度合いがわかるなら、一性および個体化の度合いもわかるという一般的な原理をここでは想定することが可能になる⁽³¹⁾。

一なるものという規定が存在者という規定に対して何かを付加するのかを問題にする『神学大全』第1部第11問題第1項の主文で、「一なるものは存在者に対して何らかの事物を付加するのではない」⁽³²⁾とトマスは明言している。このことを踏まえるなら、事物としては同一のものに対してあくまで概念的に一性および個体化と存在を区別しているにすぎないという次元のことがここでは問題になっている。『神学大全』第1部第11問題第4項で言われていたように、最大限に存在者でありかつ最大限に不可分であるがゆえに、神は最大限に一なるものであった。しかし、最大限のものとして言われているこれら三つの規定はすべて事物としては同一のものに言われているにすぎない。したがって、最大限に一なるものは事物としては最大限に存在者でもある。

以上に基づけば、一であることおよび個であること、そして存在者であることは、それらが最大限のものとしての神において捉えられる限り、すべて同じ事物に属することになる。したがって、最大限に一なるものであることと最大限に個であることの同一視とはあくまでそれが同じ事物である神に属することを意味すると理解できる。トマスの体系においては、神が持つ最高度の一性に以上のような内実が含まれていることを本節では強調することにしたい。

結

これまでの議論を簡単に振り返ることにしよう。第一節では、『神の能力について』第7問題第3項のように神が個ではないと言われる場合の個の意味が複合実体についてと言われるような意味の個であることを明らかにした。

それは或る一つの種に属する多数の個という意味であり、このような意味の個が神には適用されない。第二節では、『神学大全』第1部第3問題第2項の特に第3異論および第3異論解答に注目することで、主に次の二つのことを示した。第一に、質料を介して形相が個体化されることと質料を介さずに形相が自身を通じて個体化されることという二通りの個体化が存在するということを示した。第二に、神が自身を通じて個体化されているものとして個であるのは、単純な形相である限りでのことであるということを示した。第三節では、神の一性に関する議論を辿る中で、神が最大限に一なるものであることには、神が最大限に個であるということも含意されているという側面を強調した。その際には、一なるものであること、個であること、存在者であることが最大限のものとして捉えられる限り、それらはすべて同じ事物である神において見出されるということを経験とした。

第三節で問題になったような一性や存在という超越概念（アリストテレスの十のカテゴリーを超越して神にも適用できるような概念）に関する卓越した研究を行ってきたヤン・アーツェンは、一と個という概念が置換できる可能性を含んでいるということからトマス思想において個を超越概念として捉える可能性を示唆している。さらにアーツェンは、このようなことを述べる動機として、個性性という概念を質料による個体化という文脈に関してのみ論じることが先行するトマス研究では多かったことを挙げている⁽³³⁾。トマス思想における個の論理が質料を介した個体化を蒙る複合実体だけではなくて神をも射程に入れたものであることは本稿でも述べてきた通りであり、アーツェンの主旨は基本的に賛同できるものである。アーツェンの研究との関係で言えば、このようなアーツェンの示唆を超越概念論という枠組みに限定することなく個という概念一般という観点で分析を試みたのが本稿の立場であると言えるだろう。

最後に、今後の展望に関わることを述べることにしよう。近世スコラの思想家フランシスコ・スアレスの『形而上学討論集』第5討論第1節では、神（の本性）が個であるということがトマスよりもはっきりと明言されているように思われる。

さらには、神の本性は、多数化されえないかあるいは複数の類似するものへと分割されえないかというような仕方であり、それ自体で一なるものであり、それゆえ、一つの個的で単一な本性である。このことを理由にして神は、いかなる仕方によっても多数化されえないという仕方であらうとい

う点で一なるものである。それゆえ、神の本性は個的で単一な一性を持つ⁽³⁴⁾。

見解としては、トマスの見解とほとんど同じことを述べている箇所である。この引用箇所は、「信仰に即せば、神の本性は多数のもの [すなわちペルソナ] に共通しうるものであるのだから、神の本性は実在的に現存するものであるが、しかしながら単一で個的ではない」⁽³⁵⁾ という想定反論に対してスアレスが応答している部分である。この議論から窺えるのは、神において個であることが問題になる領域として、神の本性と諸々のペルソナをめぐる議論領域が存在するということである。スアレスにおいて神の本性と諸々のペルソナとの間で個の論理が明瞭な仕方議論の対象になっているのなら、トマスの思想においても神の本性と神の諸々のペルソナとの間における個の論理がどのように理論化されているのかを見極める必要があるだろう。このことを今後の課題として提示することにより、本論を閉じることにはしたい。

注

⁽¹⁾ Cf. ペトルス・ロンバルドゥス『命題集』第1巻第8区分第6章 (*Sententiae in IV libris distinctae*, 3 ed., tom.1, pars 2, Grottaferrata, Romæ: Editiones Collegii S. Bonaventuræ Ad Claras Aquas, 1971, p.100, ll.13-23) : 第7章 (p.100, l.25 - p.101, l.12)。

⁽²⁾ トマス・アキナス『ロンバルドゥス『命題集』註解』第1巻第8区分第4問題 (*Scriptum super libros Sententiarum*, tom.1, ed. P. Mandonnet, Parisiis: P. Lethielleux, 1929, p.218)。一次文献の日本語訳はすべて拙訳である。また、訳文中の [] は訳者による補いである。

⁽³⁾ Cf. Porro, P., *Tommaso d'Aquino: Un profilo storico-filosofico*, Roma: Carocci editore, 2012, p.520; Torrell, J.-P., *Initiation à saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son œuvre*, 4 ed., Paris: Les Éditions du Cerf, 2015, p.423。

⁽⁴⁾ トマス『定期討論集 神の能力について』第7問題第3項主文 (*Questiones disputatae*, vol.2, 10 ed., ed. P. Bazzi, M. Calcaterra, T. S. Centi, E. Odetto, P. M. Pession, Taurini-Romæ: Marietti, 1965, p.194a)。

⁽⁵⁾ トマス『神学大全』第1部第3問題第2項第3異論解答 (*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, tom.4, Romæ: Ex Typographia Polyglotta S. C. de Propaganda Fide, 1888, p.38b)。

⁽⁶⁾ 当該部分の記述の存在は、次の三つの写本でも確認することができた。Cf. Vat. Borgh. 112, 69ra; 113, 46rb; 120, 62ra。

⁽⁷⁾ Cf. トマス『神の能力について』第7問題第3項主文 (*Questiones disputatae*, pp.193b-194a)。

⁽⁸⁾ *The Power of God*, tr. R. J. Regan, Oxford: Oxford University Press, 2012, p.200。

⁽⁹⁾ トマス『神の能力について』第7問題第3項第7異論解答 (*Questiones disputatae*, p.194b)。

⁽¹⁰⁾ ここでは、トマスの体系において重要な存在者でもある天使のことを念頭に置いた上

で「通常言われる」という表現を用いた。トマスにとって、天使は人間よりも上位の知性体のことを意味している。Cf. トマス『神学大全』第1部第79問題第10項主文。さらに、天使は「諸々の種の多数化」という仕方でのみ個的なものとして区別されると言われる。Cf. トマス『神学大全』第1部第50問題第4項第4異論解答。つまり、天使においては種のみが個として見出されるというのがトマスの考えである。Cf. Suarez-Nani, T., *Les anges et la philosophie*. Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002, pp.39-50. このような仕方でも個として見出される天使が複合実体と同じ意味で「或る一つの種に属する個」とは言えないため、以下の叙述では複合実体にのみ焦点を当てたことを断っておく。天使の個性性に関する詳細な検討については別稿を期すことにしたい。

⁽¹¹⁾ トマス『存在者と本質について』第5章 (*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, tom.43, Roma: Editori di san Tommaso, 1976, p.379, ll.131-138)。

⁽¹²⁾ Cf. トマス『存在者と本質について』第2章 (*Opera omnia*, tom.43, p.371, ll.73-77)。なお、個性化の原理としての指定された質料に関する先行研究は多数存在するが、標準的な解釈を提示するものとしては次のものを挙げるができる。Cf. Wippel, J., *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas: From Finite Being to Uncreated Being*, Washington, D. C.: The Catholic University of America Press, 2000, pp.351-375。

⁽¹³⁾ Cf. トマス『存在者と本質について』第2章 (*Opera omnia*, tom.43, p.371, ll.77-84)。

⁽¹⁴⁾ 神が複合実体のような物的な存在者と同じ意味で個であると言うことはできないという論点はブライアン・デイヴィスもたびたび強調している。Cf. Davies, B., *Thomas Aquinas on God and Evil*, Oxford: Oxford University Press, 2011, pp.48-49; *The Thought of Thomas Aquinas*, Oxford: Clarendon Press, 1992, pp.44-45, 49-54。

⁽¹⁵⁾ Cf. トマス『神学大全』第1部第3問題序文 (*Opera omnia*, tom.4, p.35ab)。

⁽¹⁶⁾ Cf. トマス『神学大全』第1部第3問題第2項主文 (*Opera omnia*, tom.4, pp.37b-38a)。

⁽¹⁷⁾ トマスの体系では、天使も質料を持たず形相だけからなる存在者である。しかし『神学大全』第1部第3問題第4項でも言われるように、被造物はすべて存在と本質の複合からなるものであるため、厳密な意味での単純性は神にのみ帰される。Cf. Davies, *The Thought of Thomas Aquinas*, pp.55-56. それゆえ、ここでは話を煩雑化させないために天使のことに付いて言及しないことにする。

⁽¹⁸⁾ トマス『神学大全』第1部第3問題第2項第3異論 (*Opera omnia*, tom.4, p.37a)。

⁽¹⁹⁾ トマス『神学大全』第1部第3問題第2項第3異論解答 (*Opera omnia*, tom.4, p.38b)。

⁽²⁰⁾ この点は既に別稿で論じたことがある。Cf. 石田隆太「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の側面」、『哲學』(日本哲学会)、第67号、2016、pp.153-168 (特に pp.155-158)。

⁽²¹⁾ トマス『対異教徒大全』第1巻第42章 (*Liber de Veritate Catholicae Fidei contra errores Infidelium seu Summa contra gentiles*, vol.2, ed. C. Pera, P. Marc, P. Caramello, Taurini-Romae: Marietti, 1961, p.52a, n.346, ll.14-21)。

⁽²²⁾ この点は『対異教徒大全』の別の箇所(第4巻第10章および第14章)に基づいても言うことができる。Cf. 石田「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性」、pp.162-164。

⁽²³⁾ トマス『神学大全』第1部第11問題第4項主文 (*Opera omnia*, tom.4, p.112ab)。

⁽²⁴⁾ 以下の論述においてはヤン・アーツェンの研究を大いに参考にした。Cf. Aertsen, J. A., *Medieval Philosophy and the Transcendentals: The Case of Thomas Aquinas*, Leiden-New York-Köln: E. J. Brill, 1996, pp.236-237. 本稿とアーツェンの研究の相異については本文で後述の通りである。

⁽²⁵⁾ トマス『神学大全』第1部第29問題第4項主文 (*Opera omnia*, tom.4, p.333b)。

⁽²⁶⁾ トマス『定期討論集 魂について』第3問題主文 (*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, tom.24.1, ed. B.-C. Bazán, Roma-Paris: Commissio Leonina-Les Éditions du

Cerf, 1996, p.28, ll.316-318)。

⁽²⁷⁾ トマス『108の条項についての総長ヨハネス・ヴェルチエリに対する解答』第108項 (*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, tom.42, Roma: Editori di san Tommaso, 1979, p.294, ll.1185-1187)。

⁽²⁸⁾ 個体化の原理を存在と解釈する見解に対する反論を提示するために、別稿ではこの言明の意味を人間の魂の個体化という文脈に即して論じたことがある。Cf. 石田隆太「トマス・アキナスにおける人間の魂の個体化——魂と身体の間をめぐって」、『中世思想研究』、第57号、2015、pp.55-68 (特に pp.64-65)。

⁽²⁹⁾ トマス『魂について』第1問題第2異論解答 (*Opera omnia*, tom.24.1, p.10, ll.350-351)。

⁽³⁰⁾ トマス『定期討論集 霊的被造物について』第9項第3異論解答 (*Opera omnia iussu Leonis XIII P. M. edita*, tom.24.2, ed. J. Cos, Roma-Paris: Commissio Leonina-Les Éditions du Cerf, 2000, p.96, ll.355-356)。

⁽³¹⁾ Cf. 石田「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性」、p.159。

⁽³²⁾ トマス『神学大全』第1部第11問題第1項主文 (*Opera omnia*, tom.4, p.107a)。

⁽³³⁾ Cf. Aertsen, *Medieval Philosophy and the Transcendentals*, pp.236-237. ただし後年の著書にはそのことについての言及が省略されているように思われる。Cf. Aertsen, J. A., *Medieval Philosophy as Transcendental Thought: From Philip the Chancellor (ca. 1225) to Francisco Suárez*, Leiden-Boston: Brill, 2012.

⁽³⁴⁾ フランシスコ・スアレス『形而上学討論集』第5討論第1節 (*Disputationes Metaphysicæ*, I, Hildesheim-Zürich-New York: Georg Olms Verlag, 1998, p.147b)。

⁽³⁵⁾ スアレス『形而上学討論集』第5討論第1節 (*Disputationes Metaphysicæ*, p.145b)。

※本稿は、JSPS 科研費 15J00085 の助成を受けたものである。

(いしだ・りゅうた 筑波大学大学院一貫制博士課程
人文社会科学研究所哲学・思想専攻／日本学術振興会特別研究員 DC2)